

2023年度(令和5年度)学校評価自己評価表

城北中学校区	校番56	福山市立久松台小学校
	最終更新日	2024年(令和6年)2月5日

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、学校・教職員が自主性・自律性を発揮し「学校文化を変える仕組みをつくる」「子ども主体の学び」向かって自ら・ともに「鍛える」「支える」</p>
--

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <p>学校関係者評価報告書は全項目「十分満足できる」と評価された。中学校区で連携を深め、共通の取組で成果をあげている。各校の目標が達成できていないものについては取組の進捗状況を細かく把握し課題克服に向けてPDCAサイクルに則り実践する。</p>	<p>児童生徒の現状</p> <p>全国学力調査の結果、校区小学校は福山市の平均正答率を上回ったが、本校は下回る結果となった。また、長欠未然防止に向けて、現状や対策を話し合い、実践した。さらに、メディアウィークを設定することで、メディアとの付き合い方や利用の仕方について効果があった。</p>	<p>育成する力 21世紀型“スキル&倫理観”</p> <p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体的に学ぶ力 他者とかわる力 社会貢献力 自己形成力</p> <p>自ら考え、判断し、行動できる自律した児童・生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> 校区合同研修における、合意形成を意識した授業研究及び教科等部会の取組 DC教育を基に、ICTを活用した個別最適化した授業実践及び協議・交流の取組 家庭での効率的な学習計画の立て方・メディアとの付き合い方への取組 合同行事や乗り入れ授業、「総合的な学習の時間」交流会の取組
---	--	--	--

III 自校

<p>ミッション</p> <p>未来を切り拓く「生きる力」を育成する 「すべては子どもたちのために」を基底に据え、学校・保護者・地域が連携し、「この学校へ来てよかった」「この学校へ来てさせてよかった」といわれる学校に</p>	<p>育成する力 21世紀型“スキル&倫理観”</p> <p>めざす子ども像</p>	<p>思考力・判断力・表現力 Ⓔ</p> <p>他者とかわる力 Ⓕ</p> <p>自己効力感 Ⓖ</p>	<p>自分の考えや経験を基に自己決定したり、じっくり内省したりして、自律に向かうことができる。</p> <p>受容的で率直な対話を通して、互いの考えの共通点を見つけたり、新たな気づきを得たりすることができる。</p> <p>自分の良さを認め、難しいことでも失敗を恐れずに挑戦しようとしている。</p>
<p>学校教育目標</p> <p>自ら考え 正しく判断し 行動する 感性豊かな子</p>	<p>研究</p> <p>テーマ</p> <p>自分で決めて、やってみて、考える ～自律を促す学びの創造～</p> <p>内容等</p> <p>大切にしたいこと ①児童が、自分がどうしたいかを基準に、やってみること ②児童が、どんな結果でも、そこから前向きに学びを見出し、次につなげること 「自分がどうしたいか」で学び方や表し方を決めたり、「うまくいったか」ではなく「自分は何を学べたか」を振り返ったりできる授業づくりについて、研究を行う。</p>	<p>めざす授業の姿</p> <p>Ⓔ 自分で決めて、やってみて、考える機会を保障した授業 Ⓕ 児童が、自己決定したり、じっくり内省したりする授業 教師が、児童の実態からの確なファシリテートをする授業 Ⓖ 受容的で率直な対話を通して、新たな気づきが得られる授業 課題に対して自己決定や自己選択することができ、子ども達が進んで挑戦できる授業</p>	
<p>現状</p> <p><テストで測れる学力> (全国学力・学習状況調査等の結果より) 【○成果 ●課題】 ○全国学力・学習状況調査の「国語・算数」では全国平均・県平均を上回り、基礎的・基本的な学力はおおむね定着している。また、無回答率が低かった。 ○授業づくりで、友達との対話や図化などの意見を説明し合う場面を多くしたことで、児童が「分かったつもり」に気付けるようになった。 ●自分の意見をもち、読み手が納得するような根拠を立てて論じる力が弱い。 ●書く際に、読み手の立場に立って、自分の意見を論理的に述べる力が弱い。</p> <p><非認知能力> (2022年度末に職員で分析した児童の実態より) 【○自律に向かっている姿 ●自律から遠ざかっている姿】 ○色々な場面で、自分の考えをもてており、それを表現しようとしている。 ○友達の意見等に触れて、柔軟に意見を変えられる児童が多い。 ●周りがどう評価するかで行動を決めがちである。(自己決定しきれない) ●学習経験が「うまくいったかどうか」で振り返りがちである。どんな結果でも学びを見出し、次につなげる力がまだ弱い。</p>			

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立久松台小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	力 _セ 達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	力 _セ 達成評価	総合評価	改善方策		
3	自ら考え学ぶ児童(主体性)の育成	★	継続	自己決定して行動し、そこから前向きに学びを見出す、自律した児童の育成	児童が、「自分で決めた」「この学びがあった」と自覚できる授業づくりをする。	『やってみよう』と考え行動し、その後「じっくり振り返っている」と答える児童の割合を、各学級年度当初より15ポイント以上増やす。	年度当初よりもポイント上げた学級は6、そのうち15ポイント以上増やした学級及び100%に到達した学級は3であった。少しずつ、児童の自律に向けた取組が進んでいる。	3	2	2学期は行事が多く、児童にとる機会が多いことを活用し、児童に目標を設定させたり、ふり返りを通して自分の頑張りを自覚させたりしていく。	年度当初よりもポイント上げた学級は8、そのうち年度当初より15ポイント以上増やした学級及び100%に達した学級は7であった。	3	3	3	自己決定の場や、自己理解につながる振り返りの場を保障するために、全校で行える取組を、計画、実施する。
			継続	自分の良さに気付き、自信をもって物事に挑戦できるとともに、思いやりをもって相手と関わるることができる児童の育成	友達の良さに気付き、伝え合う取組を行う。たてわり掃除等、異学年交流を実施し、他者と関わる場を設定する。教職員間で学級経営について交流し合う研修を実施する。	QUアンケートの学級生活満足群に属する児童(非承認感や被侵害感が少ない児童)を75%以上にする。	学級生活満足群に属する児童は71%だった。児童会が中心となり、がんばっている児童を相互に見つける活動を行った。職員研修では、学級経営研修やQUの結果から2学期の取組を考え、実践している。	3	2	引き続き、職員全体で学級経営研修を行い、これまでの実践、悩みを共有する時間を設定したり、たてわり掃除等の児童のがんばりを職員間で共有したりしながら、肯定的な声掛けをしていく。	学級生活満足群に属する児童は75%だった。11学級中8学級で70%以上を達成することができた。職員全体でQU研修や学級経営研修を行い、実践を交流したり、取組を考えたりする時間を確保し、振り返りを行った。職員の実践紹介する通信を発行した。	4	3	4	来年度も、職員が児童理解や実践、悩みを相談できる研修を継続し、教職員間で高め合えるようにする。児童について学年を越えて情報共有し、早期に組織的に対応できるように、ケース会議等を適宜設定していく。
			継続	体を動かすことが楽しいと思える児童の育成	授業や休憩時間にサーキット運動に取り組めるようにする。また、委員会活動や家庭学習を通して運動に親しむ機会を設け、自分の体力や運動に関心をもてるようにする。	外遊びやサーキット運動への自主的な参加率を、各学級年度当初より10ポイント以上増やす。児童アンケートで「運動が好き」と答える肯定的割合を95%以上にする。	運動が好きと答える児童は92%だった。サーキットの設置と紹介、誰もが楽しく運動できる授業づくりについて職員研修を行った。	3	2	児童が楽しく運動に親しめるよう、児童の思いを踏まえた体育参観日の計画をする。また、体力テストの項目に則した運動遊びを紹介していく。	朝タイムのミニマラソンや大縄大会を企画したり、個々の目標に向けて運動ができる環境や時間を設定したりした。運動が好きと答える児童は90%だった。自主的な参加率が2学期までは75%だったのに対し、1月末には83%まで向上した。	3	3	3	年間を通して運動に関心がもてるようにするために、運動に関わる行事を精選し、体力テストでの課題であった投力と持久力に関する取り組みを計画、実行していく。
3	教職員の資質・能力の向上	★	継続	子どもたちの自律を促す授業の創造	教職員が、「自律を促す授業づくり」に取り組むヒントを得られる研究授業や職員研修を計	研究授業毎に、教職員に「前回の研究授業で得た学びを基に、どのような取組をしましたか」というア	肯定的割合は100%であった。教職員の主体的な授業改善につながる研修を仕組むことができ	4	4	教職員の取り組みが、児童が「自分で決めた」「学びがあった」と自覚できる授業づくりにつながるよう、他校の研修に参加する機会を保障したり、自分	肯定的評価は90%であった。全職員が他校の研修に参加する機会を保障するとともに、授業	4	4	4	来年度も、少人数での教材研究を継続して行い、教師が自分の実践にいかにヒントを得ら

				画, 実施する。	アンケートを実施する。肯定的割合を, 90%以上にする。	ている。			の取り組みの形成的評価ができる研修を設定したりしていく。	改善に向けた対話の場を設けることができた。				れる職員研修を計画, 実施する。	
3	地域に貢献する学校		継続	持続可能な社会について探究し, 地域に還元する児童の育成 (SDGs)	生活科の学習や総合的な学習の時間に, 地域に根づいた持続可能な社会づくりについて学び, 実践をする。	児童アンケート「持続可能な社会づくりのために自分達ができる事に取り組んでいる」に対する肯定的割合を80%以上にする。	肯定的割合は84%であった。継続した取り組みの中で, 児童が生活の中にSDGを取り入れることができている。	3	3	取り組んでいる内容を, 他学年や他の学校と交流するなどして, SDGsに対する意識をより高めていく。	肯定的割合は86%であった。継続した取り組みの中で, 児童が生活の中にSDGを取り入れることができている。	4	4	4	来年度も, 生活科の学習や総合的な学習の時間に, 地域に根づいた持続可能な社会づくりについて学び, 実践をする。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ, 状況の変化, 問題が生じた際は, 協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し, 十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ, 状況の変化, 問題が生じた際は, 協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し, 望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ, 状況の変化, 問題が生じた際は, 協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し, 一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く, 状況の変化, 問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り, 成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず, 状況の変化, 問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り, 成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。